〔研究論文〕

加曽利E期の世界観(I)

堀越正行

I 緒言

考古学は、過去の人間が残したものを研究の材料にしている。残したものをものとして研究するのみならず、ものから実体としての人間生活――経済的・社会的・精神的――を復原していくように努力しなければ、一向人間学の域に達しない。人間の登場しない歴史はありえないのである。

我々が資料を蓄積していくだけの資料提供者・保持者として満足するならばともかく、研究する者として自覚するならば、研究の早晩は問題ではない。その時点での研究成果は、後の史料によって補強し、修正し、より広範な、より深遠な研究段階へ前進していくための橋頭保として位置づける必要がある。

物的な考古学史料から、その裏に潜む彼らの意志思考を推考復原することは、いうまでもなく困難な作業である。それは決して個々の考古学史料から単独に論証できず、一定程度の普遍性と特殊性、その時間的・空間的複合関係・社会的・経済的背景を加味した、史料の総合的検討を経て論証せねばならないのである。

縄文時代中期後半、関東平野では加曽利E式土器群とよんでいる一群の土器が使用されていた。そして加曽利E式土器群は、関東地方西部において中部地方東南部にひろがる曽利式土器群と、関東地方北部において東北地方にひろがる大木式土器群と相接している。加曽利E式土器群は、時間的に4段階の型式の交替が認められ、原加曽利E式――加曽利EⅠ式――加曽利EⅡ式――加曽利EⅢ式と推移していく(註1)。この加曽利E式土器群を使用していた人々の特徴的な世界観――個別的ではなく全体的な、統一的ではなく主体的な――を、先行する勝坂期の主体的な世界観と、並行する曽利期の主体的な世界観との比較検討の上で復原する試みが本論の1つの目的である。

筆者は先に、土器型式の共有が交易や生業等の共通の経済的行動様式とは単純に一致せず、また同一の土器型式の共有が必らず共通の精神的行動様式をとることはないことを述べ(註2)、各々の好例を任意に抽出し、やや具体的な証明を試みた(註3)。本論では縄文時代中期に焦点をあて、より具体的な論証を試みようと思う。

II 加曽利E式土器群の成立要旨

原加曽利E式土器を嚆矢とする加曽利E式土器群は、勝坂式土器群のもつ文様要素を基礎にし、阿玉台式土器群の文様帯構成をとりいれて成立している。器形の点でも両者の影響下にあるといえる。大木式土器群とは、加曽利EⅠ式土器後半以降加曽利EⅡ式・EⅢ式土器において、大木8b式・9a式・9b式・10式土器との文様要素及び文様構成上の相似的変化過程を認めることができるが、両者間の型式差は厳然として存在していたこともまた認めることができる。しかし、加曽利E式土器群成立にあたっての大木式土器群の果した役割は、ほとんど無に等しいといえるであろう。これはまた曽利式土器群についてもほぼそのままあてはまることである。

原加曽利E式土器は、おそらく武蔵野台地において生成した土器型式であると考えられる。武蔵野台地といえば、中期前半にあって、西方の勝坂式土器と東方の阿玉台式土器が交錯する所である。この相異なる2つの土器型式が、その交錯地帯で融合し、新たに第3の土器型式を生み出すことは充分可能なことであるといえよう。この場合、その多くが阿玉台式土器ではなく、勝坂式土器の要素を継承もしくはアレンジし、新生させている。

この武蔵野台地で生まれたと考えられる原加曽利E式土器は、南方の多摩丘陵、南西方の多摩地方、西方の奥多摩地方、北方の大宮台地に波及しているが、それ以上に東京湾沿岸下総台地という

東方への波及が顕著であり、松戸・市川・船橋を経て千葉方面にまで広がっている。そこはいうまでもなく馬蹄形貝塚の東京湾ベルト地帯である。ところが下総台地にくると、武蔵野台地等西方の土器もあるが、下総的変形——阿玉台的変形をとげた土器をも生じており、複雑な様相を呈している。

原加曽利E式土器が成立した時、西方では勝坂式土器（井戸尻期）、東方では阿玉台式土器がまだ使用されていた。加曽利E式土器群は、勝坂式土器群と阿玉台式土器群の間に割り込むようにして生成し、勝坂式土器群ではなく、阿玉台式土器群の分布域をやがて飲み込んでしまう。一方勝坂式土器群の分布域は、曽利式土器群の分布域に転化する。このように阿玉台式土器群の分布域が加曽利E式土器群の分布域に、勝坂式土器群の分布域が曽利式土器群の分布域にそれぞれ変化しているのであるが、ほぼ同一の空間を踏襲しつつも、そこには大きな質的な変化が認められる。

Ⅲ　勝坂期における主体的な世界観

1.　蛇身装飾

勝坂期において顕著で、曽利及び加曽利E期に継続しない文化要素に、蛇身装飾、三本指をはじめとする手モチーフ、顔面把手付土器、立体土偶がある。これらの分布（受容）に関する問題については、本来勝坂式土器分布圏全域で検討すべきことであるが、その中央を占める山梨県の様相がまだ充分把握できるに至っていないため、調査が進み、しかも加曽利E期に強い影響を与えたと思われる勝坂式土器分布圏の東南を占める関東地方南西部地域の場合を検討することにしたい。

『古代人が神秘観を抱くのは、対象に対して、かれらが驚異の念とか恐怖の情を刺激せられることに発する。しかもそれは、その対象が同種類の他のものとはきわめて異状であるか、あるいは、かれらの経験や思惟を絶するようなものなどであるからである』。『神の顕現の最初の形である自然神（原始信仰としてのアニミズムの系譜をひく）は、すべての自然物とか自然現象について、いずれも同等同質に神聖なものとされるのではなかった。すなわち、他と著しく異っておるとか、あるいは偉大であるとか、または想像を絶する恐ろしいものとかいうように、とにかく普通でない変わったものや現象である場合に限られた』（註４）。

このような驚異・恐怖とかの神秘観を抱かせた動物は、勝坂期では蛇、それも蝮である。『はっきりした蛇身文様を表現しはじめるのは、現在のところ長野県地方に分布する梨久保式土器である。この地方の勝坂式並行期の土器——藤内１・２、井戸尻１・２・３式土器——の頃になり盛行をきわめ、中期後半、関東地方の加曽利E式土器（前半）、長野県地方の曽利１・２式土器の頃になると蛇身文様の退化が認められる』（註５）。蛇身装飾の出現が八ヶ岳山麓ではなく、諏訪湖盆地の梨久保遺跡（註６）であり、中期初頭の梨久保期である点は注目に価する。しかし、このようなハート形の蛇頭や写実的な立体的蛇類が数多くつくられ、その分布を広げるのは、勝坂期後半の井戸尻期になってからである。

武藤雄六氏は、長野県諏訪郡富士見町藤内遺跡１６号住居址出土の頭上に蝮をのせた土偶と、伴出した蛇身装飾のある土器に対し、『これ等の器物を製作した人々が、自然の脅威・四季の変化・日常生活等を全く無視して、製作し文様を描いたものとは考えられない』（註７）と、研究の基本的視座を設定した。

藤森栄一氏は、数多くの論文を通じて蝮の死と生の問題をとりあげ、『春と共によみがえる新たまの精霊への願望を、蛇或は冬眠より覚めてくる爬虫類や両棲類の象徴に見出しているようでもある』（註８）と精霊崇拝及び帰死回生思想の存在を予想し、更に蛇身装飾が蒸し器に使える土器に多く表現されていることに顔面把手付土器との共通性をみいだし、地母神信仰の一表象と考えている。

縄文時代における蛇身装飾が、中部地方東南部から関東地方西南部にかけての勝坂期にほとんど集中して存在している事実は、勝坂式土器を共有している人々の少なくとも一部が、蛇に対し特殊な感情を持っていた事実を反映するものであろう。蛇それも蝮が、勝坂期に至ってはじめて人間の眼にとまったわけではないであろうから、何も下を向く機会が多かった？という風な理由で勝坂人と蛇とを結びつけることはできないであろう。まして蛇をモチーフとするのは農耕民の特色だなどという論は、栽培論の何の例証にもならない。

更に縄文人が土器に動物の文様装飾を表現する

ことは極めて例外的であることからも、勝坂式土器に多い蛇身装飾は、勝坂人の精神的営為の何かを具体的に表現していると考えていいだろう。そこで考えられることは、蛇などの爬虫類・両生類という奇怪な動物に霊的存在を認めたという精霊崇拝、アニミズムの存在である。蛇身装飾土器に顔面把手付土器を加え、蒸し器としても使えるこれらの土器の機能と、想定される盛んな植物採集活動を考慮するならば、単に奇怪な動物のみならず、有用な植物に対してもその霊的存在を認めていたと考えることができる。つまり、勝坂人の少なくとも一部は、彼らの日常生活をとりまく自然の中に存在してくる動物や植物に霊的存在を認め、この精霊を崇拝していたと考えられるのである。このような彼らの心的態度なしに、意味のない造形はつくらなかったであろう。

しかし、このような考え方を更に発展させた意見として、『私は蛇身装飾の意味は、やはり信仰的なものへの関連性がつよく、『蛇』に対するトーテム信仰が勝坂期を頂点とする前後に広く行われていたのではないかと考えるのである』（註5）と、勝坂期にトーテミズムの存在を認める発言があるが、これは承服できない。トーテミズムにおいて氏族は、自らを動物、植物、他の自然物のうちの１つの名称でよび、そうした特定の動物、植物、他の自然物の１つと自分たちとが共同の祖先から派生したと信じている。それには種々様々な動物、植物、他の自然物が存在しているのであるが、勝坂期の場合蛇以外顕著ではなく、かつその蛇も広範囲に及んでおり、諸外国のトーテム集団との差が著しい。従って蛇身装飾等は、トーテミズムを顕現するものとは考えられない。

関東地方における蛇身装飾土器の分布をみると

☆多摩地方・奥多摩地方

東京都八王子市中原遺跡（註9a.c）	3例.写1
東京都八王子市櫓原遺跡（註10）	1例.写
東京都八王子市宮下遺跡（註11）	1例.写
東京都日の出村谷の入遺跡（註12）	1例.？
東京都奥多摩町海沢遺跡（註13）	1例.写

☆武蔵野台地

埼玉県所沢市膳棚遺跡（註14）	1例
東京都東村山市南秋津遺跡（註15）	1例
東京都小金井市中山谷遺跡（註16）	2例
東京都調布市東原遺跡（註17）	1例
東京都杉並区塚山遺跡（註18）	2例

☆多摩丘陵

東京都町田市玉川学園前遺跡（註19）	1例
東京都町田市御獄堂遺跡（註20）	1例.写
東京都町田市鶴川遺跡（註21）	1例
神奈川県川崎市登戸（註22）	1例.写
神奈川県川崎市西耕地遺跡（註23）	1例.写
神奈川県横浜市鶴見区梶山遺跡（註24）	1例.写
神奈川県横浜市港北区宮谷遺跡（註25）	1例.写

☆その他

神奈川県城山町谷ヶ原遺跡（註26）	1例.写
千葉県市川市向台貝塚（註27）	1例
千葉県市原市台貝塚（註28）	1例

となり、２０遺跡２４例に達する。多摩地方、奥多摩地方、武蔵野台地、多摩丘陵といった多摩川水系地域に蛇身装飾土器が集中していることがわかるが、武蔵野台地や千葉県下では写実的な蛇身装飾はなく、より抽象化ないし退化あるいは形骸化した装飾になっている。写という記号は写実的な蛇頭をもった蛇身装飾土器のことであり、その分布のしかたが注目される。

多摩地方、奥多摩地方、多摩丘陵といった山間丘陵部は、勝坂式土器が主体的に使用されていた地域であるから、勝坂式土器との結びつきの強い蛇身装飾がこれらの地域にみられることは不思議なことではない。これに対して武蔵野台地は、勝坂式土器を多用する集落、阿玉台式土器を多用する集落、そして両式土器を併用する集落が混在しているためか、台地西部や南部の勝坂式土器の影響を受け易い集落において一段と抽象化・退化・形骸化した蛇身装飾があるだけで、写実的・具象的造形は採用されていない。ということは、勝坂式土器一般の写実的な立体形や抽象的な矢印形の蛇身装飾がアニミズム思考の存在を顕現するものであれば、加曽利Ｅ式土器群の原型を生んだと目される武蔵野台地、さらには大宮台地、下総台地においては、おそらく原加曽利Ｅ期に先行する時期の土器と思われるがその詳細が不明な南秋津例の矢印形蛇身装飾以外アニミズムの存在を予想させない。

このことは、多摩地方、奥多摩地方、多摩丘陵の勝坂式土器後葉に並行する武蔵野台地、下総台地の原加曽利Ｅ式土器や伴出した勝坂系土器に認められるスパナ形やトグロ形の蛇身的装飾は、抽

象を脱した形骸的な装飾に化していたことを暗示させ、この運動の方向性ゆえ後続する加曽利ＥＩ式土器以降これらの地域では蛇身装飾がなくなるのである。

2. 手モチーフ

自然神を主として蛇に認めていた勝坂期の少なくとも一部の人々は、対他的のみならず対自的につまり人間の身体についての関心をも示していた。主に手と顔である。

『人間の肉体のなかで、顔を別とすれば、肉体から切り離されて自立させられたのは手が最初であろう。「手…それは人間の身体のうちでもっとも遠くまでのびる部分であるが――は、人間に生得の強さ以上の力をあたえるさまざまの物を形づくる。たとえば種々の道具や武器などがそれである。要するに手は人間の生活をたんなる動物的存在から区別するあらゆる人工物をつくる。もっとも高度な造形的機能の器官である手をあらわすことは、同時に特殊な力と呪術的な意味とをあらわすことでもあるのは、ほとんど自明であろう」。しかし、先史時代にみられるこれら各種の手のイメージが「呪術的象徴」に違いないと思うのは、ただ先史時代の洞窟壁画の一般的性質がそうだからというだけではない。あるいはまた、手こそ人間を他の動物と区別する根本的なものだという合理的解釈にもとずくだけでもない。たとえば、現在でもわれわれが「手」に名状しがたい意味のようなものを見出そうとする志向が、逆に旧石器時代の「呪術的象徴」としての手を納得させるのである』（註29）。

勝坂期の土偶・顔面把手付土器・鍔付有孔土器や深鉢形土器に認められる『人体、擬似人形の手の指は、ほとんど3本で表現されている。3本指といえば外見的には鳥か両棲・爬虫類の一部である』（註30）といわれている。3本指が動物（江上波夫氏は蛙）か人間か（藤森栄一氏）ということに対して高山純氏は、『銛先を3本組合せた、いわゆるヤス』であって、ヤス使いの名人がいてその人は畏敬の対象として信仰され、『そのような人を土偶や顔面土器等にあらわそうとしたのであるが、遺憾ながら技術的に拙劣のため3本指のごとく変形されてしまったのではなかろうか。この技術的な拙劣さについては、埴輪と土偶を比較すれば容易に気付くことであろう。すなわち、前者に何かを持った人物像がしばしば見出されるが、後者にあってはそのような例はほとんどない』（註31）と主張している。

筆者にはこの三又ヤス説は認め難い。まず土偶は技術的に拙劣だというが、長野県諏訪郡富士見町九兵衛尾根遺跡（註32）や長野県茅野市尖石遺跡（註33）出土の片手で土器を抱き片手で妊娠した腹部をおさえている土偶や、東京都八王子市宮田遺跡（註34）の乳児を抱き横すわりする母土偶などという行為を示す土偶は、これらの例によって縄文時代においてもないことはないことがわかるが派生的であり、本来的には女神像が求められ、逆に古墳時代の人物埴輪は、行為像、つまり人間の動作を表現することにその意味があり、両者間の相違は技術的な問題によるものでなく目的の相違であり、それ故縄文時代には行為像としての土偶が少ないのである。埴輪製作においても完全なる写実主義はとられていない。従って技術的に拙劣である等の技術的問題は、この場合考慮する必要がない。

また勝坂式土器使用者たちがヤスをもっていたかどうかは別として、なぜ内陸部に限って、それもヤス使いの名人だけが称えられたのかという説明が欠如していることは、説得力をもたない。高山氏の三又ヤス名人説は、その根拠が薄弱であるといわざるをえない。

当時の人間の指が3本でない限り5本指が描かれそうなものであるが、彼らはほとんど指の写実をしなかった。一般に3本指とよんでいるが、実際の表現においては2本指、3本指、4本指、5本指、6本指の種類があり、主として3本指なのであってすべて3本指ではないのである。彼らは指の確実な本数にそれほどこだわってはいない。むしろ意識的に写実を拒否していると考えられる。これで手を表現した、完成させたと思ったのであろう。そこには抽象的なるものが取り入れられ、写実主義は相対的に数少ない蛇頭等、若干の写実でなければ意味低下を招来する造形物でしか認められない。人間などの手として登場した主に3本指の手のモチーフは、それこそ手表現の手本として広まっていったのである。よほどリアルな表現法が好まれなかったわけであり、抽象的なるが故に余計神秘的な雰囲気をかもしだしている。魔力

や特殊な力をもつ「呪術的象徴性」が、こうした手のモチーフに伺える。

関東地方における手のモチーフの分布をみると

☆多摩地方

東京都八王子市中原遺跡（註9a.b)〔蛇1〕3例

東京都八王子市楢原遺跡（註35)〔土偶〕 1例

東京都八王子市小比企？（註36） 1例

東京都八王子市戸吹町（註37） 1例

東京都日の出村岳の上遺跡（註38） 1例

☆武蔵野台地

東京都国立市谷保遺跡（註35）〔顔面〕1例

東京都国分寺市恋ヶ窪遺跡（註39)〔人体〕1例

東京都小金井市中山谷遺跡（註16)〔蛇〕 1例

東京都三鷹市大沢I.C.ULoc.7（註40）1例

☆多摩丘陵

東京都多摩市多摩ニュータウンNo46(註41）2例

☆相模原台地

神奈川県相模原市勝坂遺跡（註42） 1例

となり、１１遺跡１４例にすぎない。

多摩地方に集中し、武蔵野台地南部が次ぐが他地域では稀である。半数近くが特殊な意匠文か造形をもつ土器・土偶に付随しており、手の指を表現していることがわかる。このうち中原と中山谷の各１例が勝坂式土器の直接的系譜をひく円筒形深鉢の原加曽利E式土器で、他はすべて勝坂式土器及び勝坂期の土偶である。３本指をはじめとする手モチーフは、勝坂期特有の呪術的象徴性としての手モチーフであるということができよう。

3. 顔面把手付土器

手とならんで身体の部分を特徴的に表現したのが顔である。顔は土偶にも表現されていることが多いが、勝坂期独特のものに顔面把手付土器という、顔面といっても人面が土器の口唇に把手の如くついた土器がある。

長野県の八ケ岳西南麓・井戸尻遺跡群では、新道式土器に属するといわれる九兵衛尾根３号住居址例、狢沢式土器で満たされていた九兵衛尾根７号住居址例がこの地方でもっとも古い発生期の顔面把手付土器といわれている。確実に人面になるのは勝坂式土器前半の藤内式土器になってからであり、更に定型化し、量を増すのは井戸尻式土器の時期である。井戸尻式土器という勝坂式土器後半の土器型式が終わると顔面把手付土器は消滅する。小型の土器の胴部に顔面がついた顔面付土器は、曽利４号住居址や山梨県韮崎市坂井遺跡（註43）から出土している。これらは井戸尻Ⅲ式～曽利Ⅰ式土器にかけて製作されたものであろう。従って典型的な顔面把手付土器は、中期後半の曽利期及び加曽利E期には存在しない。

中村日出男氏の集成（註44）によれば、顔面把手付土器は西が岐阜県恵那郡福島町下島遺跡、北が長野県南安曇郡穂高町西穂高遺跡、南が静岡県静岡市小鹿堀之内遺跡、東が千葉県千葉市都町の遺跡までの範囲に分布しており、その主たる分布域である長野県・山梨県・東京都・神奈川県・静岡県東部という範囲は、そのまま勝坂式土器を多用する分布域（註45）と一致している。総数１４４個、記入もれを加えると１５０個を越える。

顔面把手付土器は、その大部分が土器の内側を向いている。『新月のような柔かい弧を抽く眉、尻の吊り上がった柿の実のような眼、鼻孔はどれも縦につき、口はぽんとまるくひらいている』。『その顔面把手の内側へ向く角度がゆかいである。直立を９０度とすれば、約７５度、すべて写真⑥のように器をのぞきこむように、うつむいている。つまり、その口はその蒸し器の食物を頬張るためいっぱいにひらかれ、鼻孔にその香ばしい匂を胸いっぱいに吸いこみ、その眼は、その味覚の素晴らしさを願望する眼なのである』（註46）。顔面が『土偶の首でもあると同時に、蒸器の形態の甕の口縁で、内側をのぞき込むように内傾してつけられている。甕の中に手を出しそうなものもある。その生と死を司る神は、蒸器の上げる湯気につつまれて、じっとその蒸し上る命をみている。捧げる供献も意味すると共に、豊かな精霊のよみがえりも祈っているのであろう』（註30）。

この豊かな想像による復原は、内向する顔面把手付土器に限った場合、おそらく当を得た解釈であろう。確かに顔面把手付土器は、蒸器として使用可能な土器の口唇に顔がつくられ、しかもその顔が土器の内側に向くことに最初の、そして普遍的意味が持たれたと考えられる。しかし、すべて内向ではなかった。これについて『顔面把手は、井戸尻Ⅱ期以降のあり方として、これまで器内をみつめるようにしていた顔面が、外向きの形に変ってくる』（註47）という指摘がある。

今外向顔面把手付土器として認められる例を拾

い出してみると、長野県諏訪郡富士見町九兵衛尾根遺跡（註48）2号住居址、長野県岡谷市海戸遺跡（註49）3号住居址、静岡県三島市徳倉城山遺跡（註50）、神奈川県相模原市勝坂遺跡（註42）、神奈川県相模原市相陽中学校南方台地遺跡（註51）、東京都国立市谷保遺跡（註35）から各1例、合計6例、長野県飯田市市田吉田本城遺跡（註52）の内と外の両方向に顔面がある例を加えても7例となり極めて少ない。また時期別にみても、九兵衛尾根2号例のように藤内Ⅰ期にすでに外向土器をみ、井戸尻期に各地で散発的に外向顔面把手付土器が極く稀に製作されたことは、宮坂光昭氏が指摘した如くに井戸尻Ⅱ期を転機として内向→外向に顔向が変わったのではなく、外向顔面把手付土器自体が偶発的に製作されたことを物語っている。外向顔面把手付土器は、土器自体が食物の神器としてみなされていたのかもしれない。いずれにしても、内向・外向の如何を問わず、顔面把手付土器が蒸器形態の土器として植物質の食物と深い関わりをもった神の土器であることに違いはない。

顔面把手付土器の出土地名表は、中村日出男氏の集成（註44）にほぼつきるので列記しない。関東地方における顔面把手付土器の分布は、秋川・浅川・野川という支流を含めた多摩川流域一帯、多摩丘陵の東端、相模川流域にほぼ限定されるといってよい。つまり、多摩地方や武蔵野台地南部に顔面把手付土器が集中し、また相模原台地から多摩丘陵の東端にかけて散在しており、多摩丘陵の中心部や武蔵野台地北部から大宮台地にかけてはまだ1個体も発見されていないのである。しかし下総台地の東京湾沿岸では、顔面部が3遺跡から計3個発見されており、その意味が問題となる。

第1例は、「下総国千葉郡都村大字貝塚なる貝塚」（千葉市内のどの貝塚かまだ調べていない）発見の顔面で、最初に報告された顔面把手付土器である。土器の把手の1類型として分類され、「都式」なる呼称が与えられている（註53）。内向し、口の表現はないらしい。眼は周囲に隆帯をもって吊りあがり、両耳部と頭頂部に孔をもち、中空の内部を経て外側の大きな孔に至る。全体の顔つきは、山梨県韮崎市坂井遺跡（註43）出土の図版第22・90の土偶顔面に似ている。

第2例は、千葉県市川市姥山貝塚（註54b）で東京帝国大学人類学教室が大正15年に発掘したものである。立体的な頭髪部や貫通孔はなく、吉田格氏にいわせると『やはり顔面把手の中心地をはずれているので簡略化されている』（註55）。

第3例は、千葉県松戸市和名ヶ谷通源寺貝塚（註56）出土例である。小型鉢形土器の口縁部につけられ内向であるらしい。胎土に金雲母粉を含み、結節沈線文をもつことは、阿玉台式土器への接近を物語る。これも貫通孔はなく、頭部は一周する渦巻の隆起文があり、三叉文が3つあるという。あえて近似例を求めれば、山梨県韮崎市天神前遺跡（註43）出土の図版第18・65の顔面把手と類似する。

これら三者三様の顔面は、典型的な顔面把手付土器の顔面とは著しく異なっている。おそらく顔面把手付土器が多くつくられ、定型化する井戸尻期以前につくられたものであろう。そうであるならば、関東地方南西部で顔面把手付土器が盛んにつくられる以前に、南東部において顔面把手付土器が存在していたことになり、井戸尻期にはこの地域では顔面把手付土器が存在しなかったことになる。井戸尻期よりも前に、中部地方における土偶的風貌をもつ初源的な顔面把手付土器、ないしその造形イメージが何らかの事由によって下総台地にもたらされ、阿玉台式土器を多用する人々の一部が短期間保有していたのであろう。しかし、顔面把手付土器の意義を認めなかったためか、それで火は消えた。

4. 土　偶

関東地方の中期土偶のうち、阿玉台期、勝坂期、加曽利E期ともほとんど板状土偶に属し、そのうち勝坂期にのみ立体土偶がつくられている。阿玉台期の土偶は

茨城県稲敷郡阿見町宮平貝塚（註57）
茨城県稲敷郡阿見町高来根田貝塚（註58）
茨城県稲敷郡江戸崎町佐倉貝塚（註59）
千葉県香取郡小見川町木之内神明貝塚（註60）
千葉県香取郡小見川町白井大宮台貝塚（註61）
千葉県東葛飾郡沼南町布瀬貝塚（註62）

の現利根川下流域において6遺跡8例（宮平及び木之内神明貝塚は各2例出土している）の出土が報じられているが、前段階の土偶、たとえば

千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚（註63）

埼玉県浦和市根岸遺跡（註64）
山梨県東八代郡中道町下向山遺跡（註65）
などの土偶とは相容れず、『形態は奥羽地方北部で発見の円筒上層式a類土器に伴出の土偶や、奥羽地方太平洋岸に分布圏を持つ、大木7a式土器に伴出の土偶に近似の扁平板状の土偶である』（註66）といわれている。確かに阿玉台期の土偶は東北地方との関係において理解すべきであるが、阿玉台期土偶に一般的な結節沈線文（角押文・押引竹管文）は東北地方にくると稀で、大部分沈線文で表現されている。

阿玉台期の土偶が東北地方との関連で捉えねばならぬのと同様に、関東地方の勝坂期の土偶は、当然のことながら中部地方との関連で捉えねばならない。関東地方における勝坂期の土偶は、次の遺跡で発見されている。

☆多摩地方
東京都八王子市中原遺跡（註9a）
東京都八王子市楢原遺跡（註67）
東京都八王子市宮田遺跡（註34）
東京都八王子市峯開戸遺跡（註68）
東京都日野市吹上遺跡（註69）

☆武蔵野台地
東京都福生市長沢遺跡（註70）
東京都国分寺市滝久保遺跡（註71）
東京都小金井市貫井遺跡（註72）
東京都杉並区善福寺池付近（註73）
東京都世田谷区大蔵遺跡（註74）

☆多摩丘陵
東京都多摩市多摩ニュータウンNo.46（註41）
東京都稲城市坂浜25号遺跡（註75）

この他に多摩丘陵を中心とした地域の土偶出土遺跡の集成が昭和2年に谷川磐雄氏によって行なわれている（註76）が、各々の時期は不詳である。確実な資料による限りでは、勝坂期土偶は多摩地方から武蔵野台地南部にかけての地域に集中し、浅川・野川等の多摩川水系沿岸に分布していることが看取せられる。

勝坂期の土偶は、雁状の眼窩頭隆起と鼻梁をもつ顔面が発達した略大字形の立体土偶を特徴としている。八ケ岳西南麓・井戸尻遺跡群における『土偶の最盛期は藤内期を中心とした時期であった。しかし井戸尻Ⅱ期から製作減少の傾向がみられ、これにかわるように顔面把手の製作が盛行している。土偶と顔面把手の同じ住居址出土例のないこと、また顔面把手と器体とが別れて出土する例の比較的あることなどから、この辺に土偶と顔面把手の交替の現象に何らかの関連性がひそんでいるようにも思える』（註48）とし、『土偶と顔面把手との関係は、時間差をもつもの、すなわち、シリウス（直列）の関係で住居址内に精神的対象物として存在していたのである』（註47）という意見がある。土偶と顔面把手付土器が同一住居から発見されることは、その両者が本来密接不離な関係にあったか否かは別として、全くないことはない。藤内期の徳久利1号住居址からは、顔面把手付土器1点と土偶足部1点（註77）、井戸尻Ⅲ期の井戸尻3号住居址からも、顔面把手付土器の顔面2点と土偶破片2点（註78）が出土している。

確かに井戸尻期の土偶はその数が少ないようであるが、顔面把手付土器にとってかわられて完全に消滅してしまったわけではない。八幡一郎氏によって報告された広見（与助尾根遺跡）発見の土偶（江坂輝弥著「土偶」第3図版上段）は、屋外において直径40㎝近くの円形の小石列の中に置かれていた（註79）。この土偶は井戸尻期末の土偶と考えられている。この土偶と全体的特徴が似ているのが、山梨県韮崎市坂井遺跡（註43）第4地区3号炉址に近接して出土したという91番の土偶である。これらは曽利期土偶の前提をなす、勝坂期終末期の土偶と考えられる。

つまり土偶と顔面把手付土器は、勝坂期前半の藤内期においては土偶＞顔面把手付土器、勝坂期後半の井戸尻期においては土偶＜顔面把手付土器という量的変化を示しており、土偶のもつ意義が完全に顔面把手付土器に置換されたという意味での質的変化は示していないと考えられる。土偶は土偶としての、顔面把手付土器は顔面把手付土器としての役割があったものと思われる。井戸尻期に土偶が完全に消滅してしまったわけではないからである。おそらく顔面把手付土器は、土偶のもつ生み出すという機能を限定的にとり出し、植物質食料を食用化する蒸器の口唇に顔をとりつけ、自然の豊かな恵みに感謝するとともに食料の豊料を願ったものと思われ、土偶の派生発展形態であろう。土偶器ともいうべき顔面把手付土器は、おそらくその単純な機能の故に容易に他の形態にその機能がとってかわられたと思われ、勝坂期にお

いて発生→展開→終末のコースを完結している。

縄文時代中期以降顕著なイデオロギーの表象とみるべき遺物・遺構は、発生→展開→終末のコースをとっているが、そこでみられた思惟は、そこで消失する場合と、新たなるものに置換される場合とがあるようである。小林達雄氏は、『特に発生と終末は変革的大事件として社会的に重大な意義を有することを指摘した』（註80）が、通常は彼らの内なる思惟において変革的であって、常に社会的変革を反映するものではなかろう。まして精神的行動様式と社会的行動様式とが常に一致して変化するという保障はどこにもないのである。

5. 石　棒

『石棒出現は、縄文中期中葉後半の井戸尻期とみることができ、しかもこの時期出土の石棒には、（略）全部の出土例に顔面把手が伴っていた』（註81）。かねてより勝坂期には住居内に石柱・石棒をみず、長野県諏訪郡下諏訪町駒形遺跡（註82）をはじめとする長野県・山梨県内の諸例から、屋外の集落のある地点に立っているのだといわれてきた。しかし現実には住居内部からも屋外例を上まわって検出されている。御子柴泰正氏によれば、長野県内の駒ヶ根市中沢高見原遺跡２号住居址、上伊那郡宮田村中越西原遺跡、伊那市月見松遺跡２８号住居址、諏訪郡富士見町藤内遺跡７号住居址、同町井戸尻遺跡３号住居址から石棒が出土し、すべて顔面把手付土器と共伴していたという。他に住居址に石柱が残っていたものが２例あるが、５例の共伴例から『石棒は男性の性器を意味するものと理解することができ、必然的に顔面把手は女性を表現したものとの考えに帰着する』（註81）という。

関東地方では、東京都町田市清水台遺跡（註83）Ｆ地点５号住居址の炉の脇床面直上から出土した大型石棒片を利用した発火石とか、東京都八王子市松木遺跡（註84）凹穴１０号の横たおしにつぶれていた藤内式土器の上に『転がり落ちた』両端が破損した石棒片（これも破損後、研磨用に利用されたと考えられている）があるだけで、屋内・屋外例とも中部地方との差が著しい。ただ埼玉県比企郡小川町平松台遺跡（註85）では、円柱状の石柱と板状の立石が遺跡の西端と南端の地点に存在していた。何れも石柱に伴う遺構が不明だったので、遺構の性格は明らかではないという。同時に時期も不明である。このように石棒自体関東地方では珍しい存在であり、しかも転用していない完全な石棒はなく、中部地方とかなり違っている。石柱・石棒については、曽利期の項で再び触れる。

6. 埋　甕

縄文時代中期後半を中心とした前後の時期の住居の床面に縄文式土器を埋設した遺構がある。これを埋甕という。研究史的に略述すると、八幡一郎・大場磐雄氏の集成とその考察が昭和のはじめと１０年代にあるが、両氏とも埋葬施設説を否定し、八幡氏は『儀式などに付随するものとして信仰に関係附けることも不可能ではなからう』（註86）とし、大場氏は『恐らくは食物その他の貯蔵所ではあるまいかとの推定に導かれるものである』（註87）とした。一方後藤守一氏は、『パレスタイン地方では乳児の死骸はこれを甕に容れ、家の附近又は家の下に葬むることがある』（註88）と埋甕の埋葬施設説を発表したが一般化しなかった。

昭和３０年代にはいると、埋甕が埋葬呪術の施設であるという説が有力になってきた。先に貯蔵庫説を主張した大場氏は、長野県塩尻市平出遺跡ロ号住居址の埋甕を考察し、『それが竪穴内の一隅にあること、特に床面下に埋めてあり、もしこの竪穴がそのまま使用されたとしたら、常に意識される位置におかれてある点で、或は当時幼児または死産児の遺骸に対しては、大人のそれと全く異なった態度で処理し、または特殊な埋葬法を採ったとでも解するより外には途がない』（註89）と結論した。続いて西村正衛氏によって『埼玉県南埼玉郡和土村（現在は岩槻市）黒谷貝塚において縄文文化前期の黒浜期住居址発掘の折に床面中央部の炉に接近して、深鉢土器が埋め込まれてあり、その中に嬰児の骨が検出された（註90ａ）例が紹介された。『しかし、昭和１４年の同発掘に参加した藤沢宗平・久持恒雄両氏が、昭和１５年１２月発行の『史観』第２４冊に発表された「埼玉県黒谷貝塚発掘概報」によれば、竪穴住居址の一隅に約５０糎の凹穴あって、その中に殆んど腐蝕せる乳児の顎骨、肢骨の破片が検出されたとあり、甕棺の存在についてはふれていない』（註91）。こうした中で西村正衛氏は、『私どもが発掘した埼玉県岩槻市黒谷の黒浜式土器をだす

貝塚では、竪穴住居の床面に穴を掘って幼児骨をいれた深鉢が埋めこまれていた』（註９０ｂ）ことを再びとりあげた。ところが『これについて藤沢先生に問い合わせたところ、住居址の埋甕ではなかったという』（註９２）。藤沢宗平氏は概報では住居内の穴だといったが、神村透氏の質問に対しては住居址の埋甕ではなかったといっている。果して土器が埋められていたのか、住居の中であったのか大いに問題であるが、坂詰秀一氏の考え方をとって埋甕の最古例と考えたい。

埋甕の用途問題の不確実さは、黒谷貝塚の資料が正式に報告されずに終ってしまった（戦災にあったとのこと）ことと、貝塚を残すような集落では埋甕がほとんど採用されず、追加資料がまだでてこないことによっている。人骨と住居址をだすことを目的とした大正１５年の東京帝国大学人類学教室による千葉県市川市姥山貝塚Ａ・Ｂ地点の発掘（註54）では、Ｂ地点１号住居址の南壁下に加曽利ＥＩ式土器を利用した埋甕がみつかっているが、おそらく骨を全く認めなかったためか埋葬施設としてとりあげられていない。他の貝塚出土例も同様である。

そうなると埋甕の埋設された場所、埋設のしかたなどといった観察法がとられ、長野県茅野市尖石、与助尾根遺跡の埋甕の観察から宮坂英弐氏は『何か呪術的な効果を祈願する思惟の所産と認めなければならない』（註33）ことを述べ、また宮坂光昭氏は埋甕を恒温・恒湿性をもつ貯蔵施設である（註93）と主張し、この宮坂説の反論として桐原健氏は埋甕の特徴を７つあげて分析し、民族学上の類例をもって埋甕が主として胎盤収納施設であり、石蓋された土器やピットを幼児埋葬施設と分類規定した説を出した（註94）。この桐原説に対する修正論が渡辺誠氏の妊娠呪術を伴う幼児甕棺としての埋甕論（註95）であり、更に民俗学上の類例をもとに渡辺説に抗したのが木下忠氏の胎盤を埋める呪術論（註96）である。まさに議論百出の状態にある。

渡辺誠氏は、千葉県松戸市殿平賀貝塚（註97）の堀之内Ｉ期の竪穴住居址の床面を掘りこんで小児を埋葬し、遺体を堀之内Ｉ式土器の大破片で覆った例を埋甕幼児甕棺説の根拠にしている。しかしこれは明らかに埋甕ではない。廃屋へ埋葬したもので、遺体上部を土器で覆う“抱甕葬”である。

勝坂期の埋甕は長野県内でも少数例しかない。関東地方も同様で以下の４例が知られている。

☆多摩地方

東京都八王子市宮田遺跡Ａ６号住居（註34）

☆多摩丘陵

東京都町田市鶴川遺跡３９号住居（註21）

神奈川県川崎市土橋六天遺跡１号住居（註98）

神奈川県横浜市旭区宮沢遺跡１号先行住居（註９９）

曽利期・加曽利Ｅ期の項でも触れるが、埋甕はおそらく胎盤の埋納を主にし、時に胎・乳児の埋葬を行なったり、他に動物供犠などの儀礼を行なう際に設けられた祭祀呪術の施設であろう。

7. 小　括

関東地方南西部は、長野県中央部・山梨県・東京都・神奈川県・静岡県東部という範囲に広がる勝坂文化圏（註45）の東部に位置している。それ故当然に勝坂期に特徴的な文化要素のいくつかを認めることができるが、その分布をみると次のような注目すべき所有差が浮かびあがってくる。

o 蛇身装飾……奥多摩、多摩地方、武蔵野台地、多摩丘陵が中心。武蔵野台地には写実的な蛇身装飾はなく、抽象化・退化・形骸化している。

o 手モチーフ……多摩地方、武蔵野台地南部に多く、他地域では少ない。

o 顔面把手付土器……多摩地方、武蔵野台地南部が中心。相模原台地から多摩丘陵東端にかけて散在している。下総台地のは少し異質である。

o 土偶……多摩地方、武蔵野台地南部が中心。多摩丘陵に若干出土。

o 石棒……一次的使用の確実例報告なし。

o 埋甕……多摩丘陵３例、多摩地方１例のみ。

これを地域別に整理すると次のようになる。

o 多摩地方……蛇身装飾・顔面把手付土器・手モチーフ・土偶。埋甕は稀。

o 武蔵野台地南部……抽象化退化形骸化した蛇身装飾・顔面把手付土器・手モチーフ・土偶

o 多摩丘陵……蛇身装飾・埋甕。手モチーフ・土偶は若干。東端において顔面把手付土器

o 相模原台地……顔面把手付土器。手モチーフ稀。

o 下総台地……稀に異質な顔面把手付土器・形骸化退化した蛇身装飾。勝坂式土器の主体的な分布圏外のため基本的にはこれらの要素なし。

o武蔵野台地北部〜大宮台地……抽象化した蛇身装飾が武蔵野台地中央部で稀にあるが、本地域ではこれらの要素は認められていない。

以上から現在の八王子市を中心とした多摩地方が、山梨・長野と連なるルートの重要な中枢的役割を果していたことがわかる。しかし多摩地方から先は、それらをすべて受け入れておらず、取捨選択して受容し、あるいは全く拒否しており、各地に住む勝坂式土器使用者の行動の違いが看取される。ところで藤森栄一氏は、蛇身装飾・手モチーフ・顔面把手付土器・土偶・埋甕といった勝坂期の精神性反映物をすべて"精霊"に結びつけて理解している(註30)。そうするとこれらはみな精霊崇拝のためにつくられ、ただその表現方法が違うだけということになる。細部的な違いを考慮しなければならないと思うが、精霊崇拝に収束される呪術表現であるという考え方は、おそらくもっとも可能性のある考え方であろう。今度は地域的といった大まかな差ではなく、各集落によってまた時間的経過に従って精神性反映物が違うという種々様々な受容と拒否行為という不統一さが問題となる。

いずれにしても、勝坂期に特徴的でしかも代表的な世界観は何かという設問に対しては、最有力の考え方として"アニミズム(有霊観・精霊崇拝)"という答が用意される。豊かな恵みをもたらす自然への謳歌、それが勝坂期に特徴的な呪術原理であった。

(明治大学)

〔脚　註〕

(1) 加曽利EⅣ式土器の独立存在は認められない。堀越正行「加曽利EⅢ式土器研究史(1)(2)(3)」信濃第24巻第2・3・4号　1972

(2) 堀越正行「原始共同体社会研究の基礎理論」1971

(3) 堀越正行「土器型式の事象と論理——その相対的側面—」史館創刊号　1973

(4) 下出積與「祖先神の歴史的意義」駿台史学第24号　1969

(5) 野口義麿「縄文文化の蛇身装飾」古代文化第15巻第5号　1965

(6) 宮坂光昭「長野県岡谷市梨久保遺跡の再調査——梨久保式土器を中心として——」長野県考古学会誌第3号　1965

(7) 武藤雄六「蛇身装飾のついた土偶と土器——信濃境藤内遺跡の1新例——」考古学雑誌第49巻第3号　1963

(8) 藤森栄一「中期縄文文化論——新しい縄文中期農耕論の可能性について—」『井戸尻』1965

(9) a. 渡辺忠胤「八王子市犬目町中原遺跡発掘報告」多摩考古第2号　1961

b. 吉田格・竹内俊文「八王子市中原遺跡調査概報——中期縄文式文化の研究——」武蔵野第41巻第3・4号　1962

c. 渡辺忠胤「八王子市中原遺跡調査報告」多摩考古第5号　1963

(10) 後藤守一「樋原石器時代住居遺跡」東京府史蹟保存物調査報告書第10冊　1933

(11) 野口義麿「中期縄文文化の蛇身装飾」国華72編5冊　1963

(12) 大場磐雄・吉田格・塩野半十郎「秋川流域の考古学的調査」西多摩文化財総合調査報告第3分冊　1969

(13) 奥多摩町教育委員会「海沢第二号住居址(縄文式竪穴)発掘報告書」発行年不詳

(14) 岩井住男ほか「膳棚」鳳翔7号　1970

(15) 甲野勇「先史時代の生活と芸術」『日本原始美術』第2巻　参考図版334　1964

(16) 肥留間博・横山悦枝ほか「中山谷」小金井市文化財調査報告書1　1972

(17) 駒場学園高等学校歴史研究部・東京都立三鷹高等学校考古学部「深大寺東原遺跡」1968
石川和明「調布市深大寺町東原遺跡調査報告」多摩考古第9号　1968

(18) 谷口一夫「東京都下高井戸遺跡の中期縄文土器」考古学手帖11　1960

(19) 註(5)文献口絵。註(22)文献276。器台。

(20) 上川名昭「甲斐北原・柳田遺跡の研究　中期縄文文化期に於ける特殊遺構　」1971例示

(21) 河野実「丁地点」『鶴川遺跡群』1972

(22) サントリー美術館『土偶と土面』280　1969

(23) 樋口清之・川崎義雄・小田静夫「神奈川県川崎市野川西耕地遺跡発掘報告」上代文化第37輯　1967

(24) 神沢勇一「梶山遺跡(1)」神奈川県立博物館発掘調査報告書第1号　1968

(25) 神沢勇一「神奈川県下の縄文武土器」神奈川県考古資料集成2縄文式土器　1970

(26) 石野瑛「相模国谷ケ原石器時代住居址群」史蹟名勝天然紀念物第6集第10号、1931
(27) 杉原荘介・戸沢充則「貝塚文化——縄文時代——」『市川市史』第1巻 1971
(28) 註(22)文献279
(29) 中原裕介「呪術と芸術・「手」の呪術的象徴性」伝統と現代第13号 1969
(30) 藤森栄一「縄文の呪性」伝統と現代第13号 1969
(31) 高山純「縄文中期に見られる三本指のモチーフについて」古代文化第18巻第1号 1967
(32) 宮坂光昭「土偶と顔面把手——精神生活の資料として——」『井戸尻』1965
(33) 宮坂英弐「尖石」1957
(34) 宮塚義人・椙田光明「東京都八王子市宮田遺跡の調査(1)」多摩考古第12号 1972
(35) 甲野勇「顔面土器について」多摩考古第2号 1961
(36) 吉田格「口絵解説 動物意匠文土器」考古学ノート第1号 1971
(37) 註(15)文献参考図版334
(38) 服部敬史「岳の上遺跡」東京都西多摩郡日の出村文化財保護委員会 1972
(39) 横山悦枝「口絵解説 恋が窪遺跡出土の人体文把手」考古学ノート第1号 1971
(40) J. E. KIDDER and SHŪZŌ KOYAMA "I。C.U. ARCHAEOLOGY: PRELIMINARY REPOPT ON LOC. 7"国際基督大学学報 Ⅳ－B. 人文科学研究4. 1968
(41) 安孫子昭二・中村貞史ほか「多摩ニュータウンNo.46遺跡の発掘調査」多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅶ 1969
(42) 大山柏「神奈川県新磯村字勝坂遺物包含地調査報告」史前研究会小報 1927
(43) 志村滝蔵「坂井」1965
(44) 中村日出男「顔面把手出土地名表」考古学ジャーナル第63号 1971
(45) 八幡一郎「勝坂式文化圏の中心」信濃第16巻第5号 1964
(46) 藤森栄一「顔面把手付土器論——縄文農耕背定論の資料として——」月刊文化財61 1968
(47) 宮坂光昭「縄文中期における宗教的遺物の推移——八ケ岳山麓の住居址内を中心として——」信濃第17巻第5号
(48) 註(32)文献に同じ
(49) 中村 雄・武藤雄六ほか「海戸 岡谷市海戸遺跡第1次調査報告」長野県岡谷市教育委員会 1967
(50) 小野真一「駿豆地方に於ける土偶と顔面把手」上代文化第29輯 1959
(51) 岡本勇「原始時代の相模原」『相模原市史』第1巻 1964
(52) 中村日出男「顔面把手(二) 付長野県出土の顔面把手」郵政考古第2号 1972
(53) 沼田頼輔「把手の分類(第四)」東京人類学会雑誌第149号 1898
(54) a. 宮坂光次・八幡一郎「下総姥山貝塚発掘調査豫報」人類学雑誌第42巻第1号 1927
b。八幡一郎・松村瞭・小金井良精「下総姥山ニ於ケル石器時代遺跡」東京帝国大学理学部人類学教室研究報告第5編 1932
(55) 吉田格「表紙写真解説 顔面把手について」考古学ノート第2号 1951
(56) 湯浅喜代治「下総史料館収蔵品目録 人面把手」かみしき1 1969
(57) 大山柏・大給尹「茨城県舟島村宮平貝塚群調査報告」史前学雑誌第12巻第4・5・6号 1940
(58) 野口義麿「新発見の土偶について」考古学集刊第3冊 1949
(59) 池上啓介「茨城県稲敷郡鳩崎丘陵貝塚群調査報告」史前学雑誌第15巻第1号 1943
(60) 西村正衛「千葉県小見川町木之内明神貝塚(第一次調査)」学術研究第18号 1969
(61) 斉木勝「千葉県小見川町白井大宮台貝塚」考古学雑誌第59巻第1号 1973
(62) 金子浩昌「布瀬貝塚」『印旛手賀』1961
(63) 西村正衛「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚(第二・三次調査)」学術研究第3号 1955
(64) 清水章夫・青木義脩ほか「根岸遺跡」浦和考古学会研究調査報告書第1集 1964
(65) 吉田格「山梨県東八代郡下向山遺跡——縄文中期五領ケ台土器の研究——」考古学雑誌第48巻第3号 1963
(66) 江坂輝弥『土偶』1960
(67) 註(10)及ぶ註(35)文献に同じ
(68) 佐藤吉熊「土偶発見」中央史壇第13巻第4号 1927

井上郷太郎「辺名出土の岩版について」多摩考古第１号　1960
(69) 上川名昭ほか「日野吹上遺跡」1970
(70) 川崎義雄ほか「福生市長沢遺跡発掘調査概報」1972
(71) 吉田格「東京都国分寺町中期縄文式竪穴住居址調査概報」武蔵野第３２巻第３・４号 1952
(72) 吉田格「小金井市貫井遺跡出土の前田家所蔵の石器土器」小金井市誌編纂資料第６編 1966
(73) 篠遠喜彦「善福寺池附近にて採集の土偶頭部」西郊文化第６輯　1953
(74) 桜井清彦・杉山荘平・栗原文蔵ほか「大蔵遺跡」新修世田谷区史付編　1962
(75) 稲城市文化財調査委員会編「稲城市遺跡調査概要（埋蔵文化財）」稲城市文化財調査報告書第１集　1973
(76) 谷川磐雄「神奈川県中郡大根村の石器時代遺跡調査」歴史と地理第１９巻第５号　1927
(77) 宮坂英弐「富原・徳久利遺跡」『井戸尻』1965
(78) 宮坂英弐「池袋・井戸尻遺跡」『井戸尻』1965
(79) 八幡一郎「信濃諏訪郡豊平村広見発見の土偶」人類学雑誌第３７巻第８号　1922
(80) 小林達雄「縄文晩期における<土版・岩版>研究の前提」物質文化１０　1967
(81) 御子柴泰正「石棒の性格と顔面把手との関係について――長野県伊那市月見松遺跡例を中心として――」信濃第２４巻第６号　1972
(82) 中村竜雄「環状住居址群と立石」古代第４２４３合併号　1964
(83) 浅川利一・戸田哲也「町田市玉川学園清水台遺跡緊急発掘調査略報」文化財の保護第３号 1971
(84) 吉川幸宏「八王子市松木遺跡発掘報告」多摩考古第９号　1968
(85) 金井塚良一編「埼玉県比企郡小川町平松台遺跡――発掘調査の概報――」1969
(86) 八幡一郎「日本先史人の信仰の問題（続）」人類学先史学講座第１４巻　1940
(87) 大場磐雄「南豆見高石器時代の住居趾の研究」考古学研究録第１輯　1927
(88) 後藤守一「船田向石器時代住居遺蹟保存物調査報告書第１０冊」1933
(89) 大場磐雄ほか「平出」1955
(90) a．西村正衛「信仰」日本考古学講座３　縄文文化　1956
b．西村正衛「埋葬」日本の考古学Ⅱ　縄文時代　1965
(91) 坂詰秀一「日本石器時代墳墓の類型的研究」日本考古学研究　1961
(92) 神村透「南信地方の埋甕について――その学史と事例――」長野県考古学会誌第１５号 １９７３
(93) 宮坂光昭「縄文中期勝坂と加曽利Ｅ期の差」古代第４４号　1965
(94) 桐原健「縄文中期に見られる埋甕の性格について」古代文化第１８巻第３号　1967
(95) 渡辺誠「埋甕考」信濃第２０巻第４号 1968
渡辺誠「埋甕考（続）」古代文化第２０巻第７号　1968
渡辺誠「縄文時代における埋甕風習」考古学ジャーナル第４０号　1970
(96) 木下忠「戸口に胎盤を埋める呪術」考古学ジャーナル第４２号　1970
(97) 村上俊嗣「松戸市殿平賀貝塚調査報告」考古学雑誌第５２巻第４号　1967
(98) 久保常晴・関俊彦「川崎市土橋第六天発掘調査報告」川崎市文化財調査集録第５集　1970
(99) 佐藤安平ほか「横浜市旭区宮沢遺跡調査報告」昭和４４年度　横浜市埋蔵文化財調査報告書 １９７０